

# ミュンヘン日本人国際学校における国際感覚育成のための取り組み

前ミュンヘン日本人国際学校 教頭

鳥取県西伯郡伯耆町立岸本中学校 教頭 山 本 泰

キーワード：国際感覚育成、語学力、異文化体験・異文化理解、主体性

## 1. はじめに

私が3年間勤務したミュンヘン日本人国際学校では、それまでもドイツ語学習や現地理解学習、現地校交流などに積極的に取り組んできた。しかし、いずれも単発的になりがちで、より継続的な取り組みが求められていた。

また、海外にある学校として、その環境を生かしながらどのようにして子どもたちに望ましい国際感覚を身につけさせるかという課題があった。

そこで、それまでの取り組みを統合・発展させていくために、新たに全校で「国際感覚育成教育」として取り組んでいった。ここに、その概略を紹介する。

## 2. 「国際感覚育成教育」とは

「国際感覚育成教育」に取り組むに当たって、まず学校として「国際感覚」とは何かを考えた。その結果、「国際感覚」を構成する要素として、以下の3つのものを定めた。

- ① 語学力、コミュニケーション力
- ② 異なる文化、習慣、価値観への理解と自国の文化や事情についての知識
- ③ 主体性、協調性、強い精神力とリーダーシップ

そして、このような知識や能力が日常生活の中で言動や思考手段として表れたものを「国際感覚」と捉えることとした。

上記のような共通理解のもと、全教職員が協力して「国際感覚育成」のための様々な取り組みを行っていった。

## 3. 「国際感覚育成」の取り組み

### (1) 現地採用教員によるドイツ語学習

人と人とがコミュニケーションを取るために大切なものはいろいろあるが、その一つは言葉である。ミュンヘン日本人国際学校でも、現地理解を深めるのに役立つ一つの手段とするために、小学部低学年で週4～5時間、高学年や中学部では週3時間程度ドイツ語の授業を行っている。授業を受け持つのは現地採用のドイツ人教師で、基本的にすべてドイツ語で行われる。児童生徒は、小さい頃からドイツで暮らしている子から、昨日ドイツにやって来た子まで実態は様々だが、レベル別の3コースにわけられて学習に楽しく取り組んでいる。まずは聞いて話すことから始め、次に書いたり読んだりすることを学んでいく。



低学年のドイツ語授業

ミュンヘン日本人国際学校におけるドイツ語の授業内容の概略は以下のとおりである。

### 【小学1年生】

小学1年生の授業では、遊びを交えながらドイツ語にアプローチしていく。絵本と付属のCDを通して、生徒たちは小熊のベニーと休暇を森で過ごすシュナイダー家の人たちに出会う。

小学1年生の授業における教育的なアプローチは、教材の中で物語・語りという形で表れている（ナラティブアプローチ）。毎回の授業で子どもたちは、まず絵本を見ながらCDを聞く。この際、子どもたちは比較的複雑な文章と単語に直面することになるが、同じ物語の一部を何度も繰り返し聞くことで、重要な語彙と文章構造を少しずつ、しかも自然に身につけていく。その後、遊びながら語彙をしっかりと定着させる段階へと入っていく。

そのほか、授業では歌や子ども向けの言葉遊び、ロールプレイも行う。バイリンガルのクラスでは、ネイティブスピーカーの生徒たちに合わせた授業を行う。そのため、上述内容とは異なる教授法が用いられる。

小学1年生は日本語の習得が優先されるべきであるため、まだアルファベットの読み書きは行わない。

### 【小学2年生】

小学2年生の授業では、主にアルファベットの読み書きを行う。成人の外国語学習者には簡単に思えることだが、アルファベットを習ったことのない日本人の7歳児にとっては大変な挑戦となる。ただし、ここで重要なのは、アルファベットをきれいに書くことのみではない。そもそも子どもたちは日本語の書き取り練習を通して、細かいところにまで配慮して字を書くことができる。そのためアルファベットを学ぶ際に大変なのは、むしろ個々のアルファベットの組み合わせのパターンとドイツ語の発音の規則性に気づき、それを理解し、実際に使用することである。小学2年生の1年間は、アルファベットの読み書きに費やす。

### 【小学3・4年生】

小学3・4年生のクラスでは、ドイツ語を学習する外国人向けの教材を使用する。3・4年生の教材は、劇を通して学ぶことを目的としており、歌も多く含まれている。たくさんの絵物語があり、まねて演じてみようという気になる。しかしながら、テキストにはドイツ語文法を学ぶための要素が含まれており、さらにワークブックには単語の表を作成することができるようになっている。つまり、同教材はドイツ語を体系的に習得することができるよう作られているのである。

### 【小学5・6年生、中学1・2・3年生】

小学5年生以降のドイツ語の授業は、成人向けの授業内容とほぼ同様になる。教材はA1、A2、B1、B2、C1、C2のレベルで表されるヨーロッパ言語共通参照枠を基準としている。基礎レベルのドイツ語で自分の意見や考えを表現するといった基本的な能力を身につけることのほかに、ドイツ語の授業を通して、ゲーテ・インスティトゥートで行われる公式の検定試験が受けられるようになることを目的のひとつとしている。検定試験は通常、2月か3月の年度末に行われる。

小学5・6年生の授業はA1およびA2レベル、中学生の授業はA1とB1レベルの間に設定されている。小学5年生以上では、このドイツ語検定に挑戦する子が多くいる。

授業で扱うテーマは、学校や趣味、家族、友だち、食べ物、1日のスケジュール、スポーツ、洋服、住まい、ドイツの地域学習、職業など生徒たちの興味のある分野となっている。

## (2) 校内文化祭 —ドイツ語学習を生かして—

「校内文化祭では、全クラスがドイツ語による表現活動を行う」と年度当初に職員で申し合わせ、1学期のうちから各クラス担任がドイツ語担当の先生と相談しながら中身を決めていく。ドイツ語の教科書にある話を元にしなが独自に歌や踊りを入れたもの、ドイツにもある「学校演劇集」から題材を選び、日本でお馴染みのアニメ主人公を登場させるようにアレンジしたものなど、いずれも自分たちの日頃の学習や学年の特色を生かしたものである。中でも、これまでの社会科や総合的な学習の時間で学んだことを元に、歌やスライドを交えて戦争や平和についてのドイツ語による意見発表を行ったときには、会場の保護者はもちろんドイツ人のお客様からも大きな拍手をいただいた。たくさんの方の前で母国語でない言葉で表現活動を行うことは、子どもたちにとって大きな自信となっている。

### (3) 現地校との交流学习

ミュンヘン日本人国際学校では、毎年1回、全クラスで現地校との交流学习を行っている。あらかじめ現地の交流相手校と連絡を取り、担任同士が交流当日の打ち合わせをした上でお互いに学校を訪問し合っている。

自校に招待したときには、まず教室で顔合わせをした後、体育館でゲームや運動をして緊張をほぐす。子どもたちは、少しぐらい言葉が通じなくてもすぐに打ち解け笑顔で交流が始まる。パウゼ（小休憩）の時間には、準備してあったおやつを食べたり一緒におにぎりを作って食べたりする。その後、教室に入り、工作や折り紙をしたり、ドイツ語を漢字で表現した名前を筆で書いたりして日本の文化を通して交流する。

中には白や杵を使ってもちつきをしたクラスや全員で将来の夢について語り合ったクラスもあり、言葉や文化の違いを体感し、共有しながら楽しんでいる。

現地校を訪問すると、まずエントランスやホールで簡単に顔合わせをしたあと、すぐに教室に行っているいろいろな活動を行う。それぞれの学校の特色を生かした活動を準備してくれている。ある学校では、美術に力をいれているということもあり、カーニバルの季節に合わせてお面作りをした。言葉は分からなくても見よう見まねでお面を作り、お互いにできあがったお面を顔に付けてうれしそうだった。ほとんどの学校で準備してくれるパウゼでは、ケーキやクッキーを保護者が用意してくれるところもある。交流当日にも会場に来て、準備をしたり取り分けたりしてくれる時もある。

交流学习では、現地校の子とペアを組むことがよくある。初めて出会うドイツ人の子とうまくコミュニケーションが取れるかどうか、最初はみんなどきどきしている。ゲームや活動を通じて、身振り手振りも交えながら何とか相手に自分の言いたいことが伝わったとき、子どもたちはとても大きな喜びを感じる。そしてそれが次の交流への意欲となっていく。同じ学校という場所ではあっても、日本とドイツ、それぞれの環境や習慣に違いがあることを身をもって感じる事ができるのが現地校交流である。



習字による交流学习

### (4) 現地理解学習 —異なる文化、習慣、価値観の理解—

現地理解学習は、子どもたちが地域に出かけ異文化に触れることを通して、自分たちの生き方について考えることをねらいとしている。ミュンヘン日本人国際学校では、総合的な学習の時間を利用し、ミュンヘン・タイム(MT)と呼んで、毎学期各学年ごとに計画的に様々など所に出かけて学習している。その一環として、ミュンヘン近郊にあるダッハウ強制収容所に中学3年生と一緒に出かけた。

ダッハウ強制収容所は、ナチスの強制収容所の中で最も古い強制収容所のひとつと言われ、後に創設された多くの強制収容所のモデルとなったところである。現地では、収容所として使われていた当時の建物をそのまま残した資料展示館や収容者の住居跡、記念碑などを見学した。同行したドイツ語担当の先生から聞いた「この収容所は、過去の悲惨な出来事を忘れず、二度とこのようなことを起こさないようにするために残されています。ここは私たちドイツ人のための施設なのです」という言葉がとても印象的だった。

バイエルン州では、すべての子どもたちが必ずここを訪れて過去の出来事について学ぶよう、学校に義務づけられているそうである。当日も同年代と思われるたくさん子どもたちに出会ったが、皆、真剣な表情で説明に聞き入っていた。

その後、ミュンヘン大学を訪れた。ミュンヘン大学には、「白バラ抵抗運動」で知られる、当時ミュンヘン大学の学生であったショル兄妹のレリーフや記念碑、資料館などがある。大学構内は自由に見学でき、実際に反ナチス運動を呼びかけるピラがまかれたホールの吹き抜けでは、皆が下をのぞき込みながら当時の様子に思いをはせていた。

#### (5) 職員による現地校訪問

子どもたちが下校した後の時間を利用して、ギムナジウム・ディアクセン校（Gymnasium Derksen）へ全職員で現地校訪問に出かけた。この学校とは本校の5、6年生が交流学习を行っていることもあり、好意的に私たちを迎えてくれた。

「ギムナジウム」は、小5から高3までの子どもたちが通う、主に大学への進学を目的とした学校だが、日本のいわゆる進学校とは異なり、学校により様々な特色を持っている。

「ディアクセン校」の特色は次の5点である。

- ① 音楽や美術の芸術科目に力を入れていること。
- ② 政治や平和についての学習を年間を通じて行っていること。
- ③ 必修教科として「ドイツ語」「数学」「外国語」「物理」が週3～5時間あること。
- ④ 学年に応じて宿題が毎日1時間半から3時間程度分出されること。
- ⑤ 1週間ほどの宿泊学習を行い、国内外のいろいろな学校と交流していること。

外に通じるドアを開けるとそのままステージになるという玄関ホールは、この学校の特徴を表しているようでとても印象的であった。

#### (6) 宿泊学習 —主体性、協調性、強い精神力とリーダーシップ—

毎年春に行う宿泊学習は、小学5年生以上の子どもたちにその後の学校行事の中でより一層リーダーとしての役割を果たしてもらいたいと考えて行っている。

活動の中心は、中学部3年生を中心とする縦割り班を利用した課題解決的な活動である。内容は年によって変わるが、飯ごう炊飯、ウォークラリー、キャンプファイア、各種アクティビティ、エンブレム制作などを行う。

この宿泊学習の特徴の1つ目は、小学5年生から中学生までという幅広い学年の子どもたちを、1人の班長がまとめていくという点である。例年、班長は中学3年生が努めるが、人数も少ないため各班ほぼ1人しか中3はいない。班をまとめていく上での班長の役割は重要なので、班長が感じるプレッシャーはかなり大きく、毎年そのことが感想文に書かれている。

2つ目の特徴は、子どもたちの自主的な活動である。例えば、飯ごう炊飯でも、材料や道具の準備は教師が行うが、火をおこす、ご飯を炊く、食材を調理するなどの活動にはほとんど手を貸さない。それぞれの役割に応じた行動を求め、班長を中心に試行錯誤しながら活動していく。時間もかかり、時には十分な食事にならないこともあるが、子どもたち同士のつながりは強まっていく。

## 4. おわりに

ミュンヘン日本人国際学校における「国際感覚育成教育」はまだ始まったばかりであるが、これまでの実践を生かしながらこれからも職員研修や授業研究会などを行っていかうとしている。研究主任やコーディネーター役の先生を中心に、派遣教員とドイツ語教員が協力しながら研究に取り組み実践に努めていくことで、この「国際感覚育成教育」がますます充実していくと確信している。